

春日神社石造物調査

陰地祐輝

境内にある石造物は石燈籠 18 基、鳥居 3 基、手水鉢 3 基、狛犬 2 対、社号標 2 基、献燈台 3 基である。石燈籠の形状は円柱型が 6 対 12 基と最も多く、次いで神前型が 2 対 4 基、撥型が 2 基となる。年代のわかる石造物のうち近世まで遡るものは石燈籠 6 基と手水鉢 1 基のみであり、古いものから元禄、延享、天明の年号が確認できる。そのほかは全て明治以降に作られたものである。今回のフィールド実習では元禄、延享の年号をもつ石燈籠を対象に実測図を作成した。以下にその詳細を記述する。なお、番号は境内配置図に対応するものである。

春日神社内に鎮座する関稻荷大明神前の 1 対 (7, 8) のうち、7 の石燈籠を対象に実測図を作成した。形状は円柱型で笠部の形態が他の石燈籠に比較して簡素なものとなっている。どちらも延享年間の銘をもつが 7 は延享 5 (1748) 年、8 は延享 3 (1746) 年と製作年代がわずかに異なり、形状についても基台部を構成する石の数やその意匠が大きく異なる。

本殿前には 2 対の石燈籠が並んでおり、そのうちの 1 対 (14, 15) に元禄 10 (1697) 年

の記念銘が確認できる。形状は円柱型で笠部に蕨手の表現をもち基台部には花卉が表現されるなど、多くの装飾が施されている。

社務所と本殿の中間に位置する 19 には元禄 9 (1745) 年の記念銘が確認できる。形状は当神社では少数の撥型である。また、笠部は唯一円形を呈するものであり、火袋も球状という当神社において他にはみられない表現を多くもつ。この石燈籠は施主に「京住人金子氏」とあり、京都の人間によって寄進されたものであることがわかる。この金子氏について、京都における行政の範囲を確認するために書かれた『元禄覚書』という史料内に「西陣寺之内横町 太鞍 金子勘助」という記述があり、寄進者の金子氏である可能性を指摘できる。この石燈籠の特異性は寄進者の出自によって生じたものである可能性が高い。

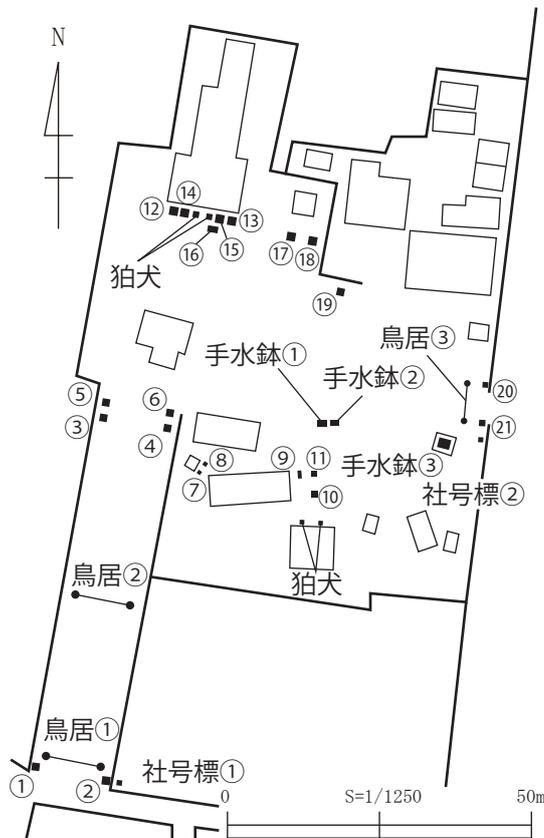


図1 春日神社(1)

以上実測図を作成した3基を除く近世以前の石造物は、元禄7（1743）年の記念銘が確認できる手水鉢1と、天明4（1784）の記念銘が確認できる撥型の石燈籠18の2基である。石燈籠18は秋葉山の銘をもつ秋葉燈籠であり、中台より上部が木造であることが特徴である。

手水鉢1をはじめとして元禄年間の記念銘が確認できる石造物が多いことから、当神社が元禄年間に整備された可能性が考えられる。また、石燈籠18の銘文から京都の住人と関係が明らかとなったことは大きな成果といえる。

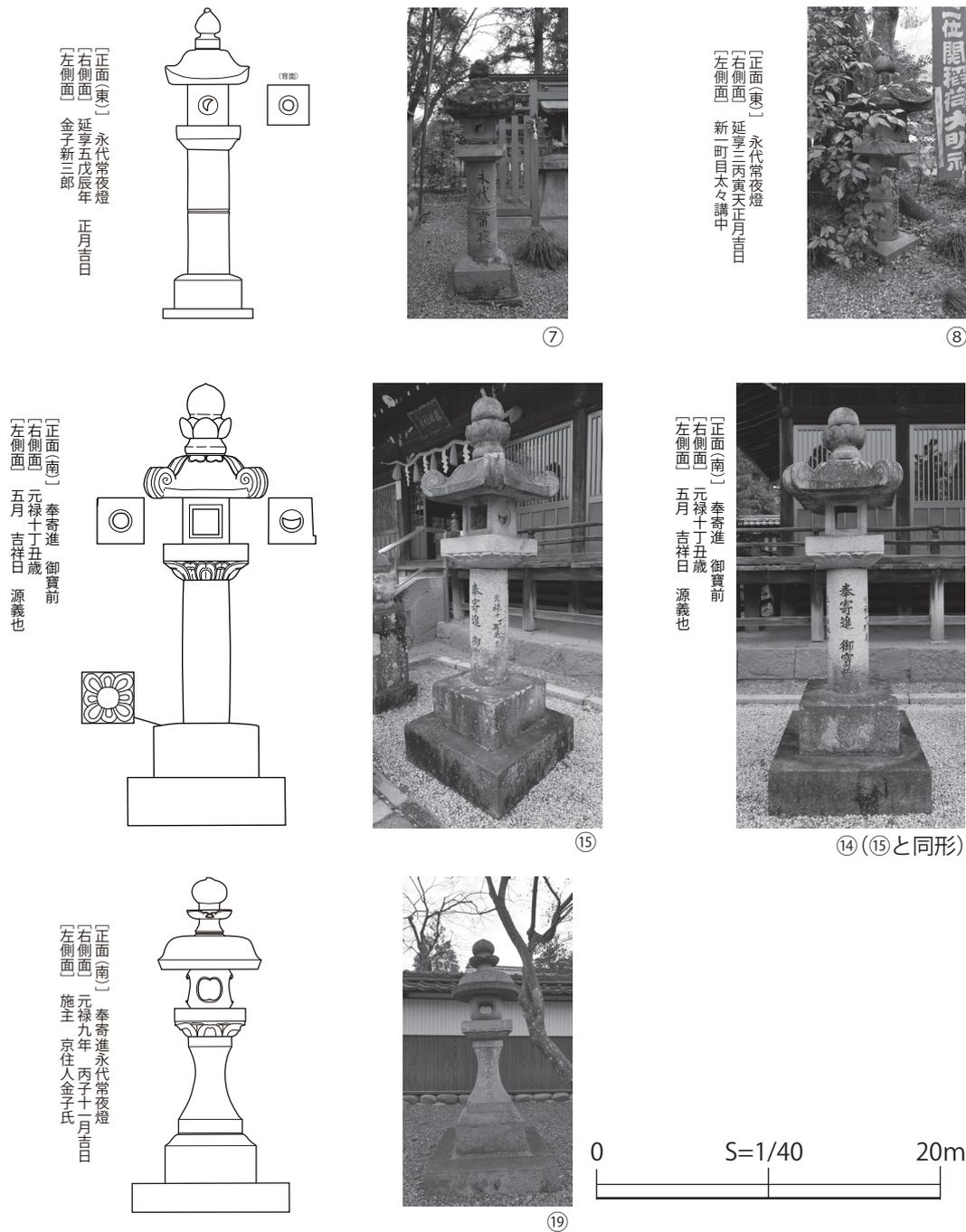


図2 春日神社(2)